詩余ものがたり　南宋篇（一）

―清・葉申鄉『本事詞』―

松尾肇子

一、左誉

左誉(字は与言)は、科挙に及第した後、銭塘の幕府で補佐の仕事をしていました。杭州に張芸という名妓がおりまして、その娘の穠は、容貌も芸も素晴らしく天下に知られておりました。左誉はこの娘におおいに目をかけており、彼女のために〔眼児媚〕を作って次のように言いました。

たかどのの上は黄昏れて　寒そうな杏の花、
斜めの月が浮かぶ　小さな闌干。
ひとつがいの燕、
二筋にならんで渡る雁、
美しい角笛の音が消えていく。

あや絹を張った窓辺　その人は東風のなかで、
春の寂しい思いに涙をこぼしているだろう。
やはり昔のままにちがいない、
満々とした秋の水(のようなまなざし)、
おぼろげな春の山(のような眉)。

また「ひとしきりの別れの悲しみを、絵にするとすれば、横なぐりの風と斜めに降る雨がしおれた柳をうるおすさま」、それに「ときおろした黒髪に水を切ったようなまなざし、おしろいをはたいたのか白くチーズを揉んだのか　しっとりとした肌」の諸篇は、どれも穠のために作ったものです。

その後穠は張俊に嫁ぎ、姓を章と変え、上奏によって大国に封じられました。紹興年間、左誉は官職を求めて都の臨安に行き、休日に、一人で西湖に臨む二つ山を遊覧していました。突然たいそう豪奢な車に出会いましたが、中にいた美人が、とばりをかかげて左誉を振り返ると眉をひそめて、「いま菱花の鏡を手に取って映してみましょう、夢の中で巡り会ったのではないかしら」と言います。左誉がじっと見つめてみると、なんと穠なのでした。左誉はぼんやりとして気を失ったようになり、すぐにたもとをからげて(世を捨て)東に戻り、仏教に専心しました。『花庵詞選』はこの詞を阮閱(字は閱休)の作だとしますが、誤りです。

二、洪邁

洪邁(字は景盧)は、紹興年間、臨安で詞科の試験を受けました。試験場を出た後、一緒に受験した数人と、抱剣街の孫氏の小さなたかど

のに立ち寄りました。折しも月が真昼のようで、皆で闌干に身をもたせたり机に寄りかかったりして、美しい輝きを愛でていました。にわかにふたつの灯芯が花形を作り、真珠を連ねたようにまぶしく輝きました。孫姫は賢くて、座にいる人たちに「今夜月は美しく輝き、灯火は花を結んで吉祥を献じております。皆様は尚書省の試験で才能をお較べになりましたが、よい成績をお納めになるのは間違いございません。どうぞ一首ずつ詞をお作りください、後日の佳話と致しましょう」と言いました。何作善(字は自明)が最初に〔浣渓沙〕を作りました。次のようなものです。

慌ただしく酒肴を求めて玉のように麗しい人を訪れた。
灯花は祝賀を献じて座に春を添えてくれる。
若君を歓迎して清新な詩句を求めた。

薄く掃いた黛 愛らしいまなざし 情を含んで見つめる。
軽く柔らかな雲なす髪 弱々しくほっそりした柳の腰 思いはまこと。
今から 清風明月は 仕事がなくのんびりしている人のもの。

回し見てほめそやしたものの、皆ひそかに末句に希望が叶わない言葉があるのをいぶかしく思いました。続いて洪邁が〔臨江仙〕を作って次のように言いました。

美しい宴席に喜びを待てば 喜びはまさに叶い、
たかどのにはめでたい気配がたっぷり。
かんざしを挿したあなた 小篆香はくゆり 灯火は赤く花を結び、
喜ばしい結果を、
主人に報告してくれるに違いない。

月はまんまる 光は満ちあふれ、
月の広寒宮殿は はなやかだ。
そこに住む姮娥(のような貴女)が相手をしてくれたのは 曲がった闌干の東、
雲のはしごの遠くないことを知って、
軽々と春風を踏む。

孫姫はいっぱいに酒を注いだ大杯を捧げ、洪邁に言祝いで「学士様はきっと良い成績を納められましょう。このめでたいしるしはあなたのために設けました。」と言いました。ほどなく洪邁はその言葉通り及第し、その他の者は皆帰郷するよう告げられたのでした。

三、向子諲

向子諲(字は伯恭)は、鄉林居士と自ら号しました。神宗の向皇后の親戚で、詞を巧みに作りました。『酒辺詞』があり、みずから「江南新詞」「江北旧詞」に分けています。その言葉は風流で、常々詞をたくさん贈りました。宋暎(字は景晋)が待制だったときの宴席では、曾幾(字は吉甫)の韻に和して、宋暎の家の小蘭と小桃という歌姫に〔浣渓沙〕を贈りました。次のようなものです。

緑の木々や紅い花がとり囲んでいる 美男の宋玉の家との間の垣根。
ひそやかな蘭は木々の下 折しもかんばしく香っている。
桃の花は暖かな天気に 玉のような花から香りをたてている。
あの名宰相の広平公(宋璟ならぬ宋暎どの)の心を 鉄のようだと誰が言うだろうか。

詩余ものがたり　南宋篇（一）

艶やかな姿も 上品な風情も どちらも忘れがたい。
蘇州知事の私は老いてしまって もう夢中にはなれないのだが。

銭氏のそばに仕える軽軽という者に〔殢人嬌〕を贈って次のようにいいました。

梨の花のように白く、
柳のわたのように柔らか、
蝶々は一所に長くじっとしていた。
春風は気まぐれで、
不意に吹いて連れ去ってしまい、
美しい蝶々をどうやって手に入れることができようか、
柔らかな糸が空の中ほどで引きとどめたのに。

秋波は魅惑的で、
手のひらで舞うかのような魅力的なその風情、
はっきりしているのは、あかく染まる雲が集まってできていること。
その昔の趙飛燕を、
美人の数のなかに入れるのは 今からはやめよう。
すべては高唐台でみた夢の中の神女ではないだろうか。

何文縝・倪涛（字は巨済）・王元衷・蘇過（字は叔党）とともに張子実の家で宴会し、張氏に仕える賀全真というものに〔玉楼春〕を贈りました。次のようなものです。

雲のかかる窓 霧に包まれた高殿を 春風がぬけて、
蝶や蜂が飛び巡り 花の気配を知らせている。
梅の風味のように人を悩ましくさせ、
まるで柳のように酔ってしなだれかかる腰つき。
細く聞こえてくる一曲の情はひたすらに厚く、
うっすらと黛を引いた眉を なぜひそめているのだろう。
帰る時には良い月がもう見えなくなり、
真によい香だけが袖に満ちている。

扇に詞を書いて欲しいと願った趙総憐には〔浣渓沙〕を贈りました。

趙や燕の国の美人のような花の中の仙女。
細く罫を引いた紙に永和の年（と始まる）蘭亭帖を書く。
時には心を醒ます絃を静かにつま弾く。
茶碗に茶を注ぎ分け かすかに酔ったあと。
碁盤によりかかって まげが傾く。
その風流な姿はまったく可憐だ。

思うに趙総憐は囲碁・茶・書・琴が出来たのでしょう。
道教の尼の装いをした郭小娘には〔南歌子〕を贈って次のように言いました。

はるかに遠い天上の人のすがた、
軽やかに波に浮かぶ身。
玉の木々が生い茂るところは 世間を遠く離れていて、
野原の平凡な草花がなんとなく春を過ごすのとは違っている。
かわせみの羽根飾りを両耳に垂らし、
黒い薄絹で巧みに作った頭巾をかぶっている。

真珠の数珠を動かさず 両眉をひそめ、
化粧をしなければ生来の品性がすっかり表れるのだと信じている。

四、辛棄疾と銭銭

辛棄疾(号は稼軒)には銭銭という侍女がおり、たいそう寵愛していました。晩年になって帰すことにしたとき、〔臨江仙〕を口ずさんで彼女に贈って言いました。

酒を楽しみ詩を作ることに不精になってから、
舞に揺れる足もと 歌を載せる扇への興趣も衰えてしまった。
晴れた涼しい夜に月が丸い。
杜甫はまことに物好きで、
残った一つの銭を眺めたものだ。

晩年 人は程不識を(一銭の値打ちもないと)ばかにした、
どうして阿堵(銭)にぐずぐずさせたのか。
柳の綿と(銭の形をした)楡のさやとが雪のように空に舞い落ちる。
これからは花影のもと、
(銭のように)丸い緑の苔を見るだけだろう。

五、辛棄疾と呂正己のむすめ

呂婆は呂正己の妻です。正己は都の役人だったことがあり、娘を辛棄疾に嫁がせたのですが、些細なことで怒りに触れ、離縁されました。辛棄疾は後悔して彼女のことを思い、〔祝英台近〕を作って次のようにいいました。

かんざしを二つに分けて贈ったのは、
(その昔王献之が寵愛する)桃葉を迎えた渡し場、
柳はもやにけぶり南の浦を暗く閉ざす。
高楼に上りたくないのは、
十日のうち九日は風雨だから。
腸を断ち切るように転々と飛ぶ紅の花を、
かまう人もない。
そのうえ鶯が鳴きながら飛ぶのを誰が止められようか。

鬢のあたりをさぐってみる。
試しに花を手に取って 帰ってくる日を占い、
かざしたかと思うと また数え直してみる。
うすぎぬのとばりの中 灯火は暗く、
夢の中でむせびながら話した。
あの春は愁いを連れて来ておきながら、
春はどこへ帰って行ったのか。
愁いを連れて行かずに。

六、辛棄疾と壁の言葉

辛棄疾は長沙への道すがら、壁に女性が書き付けた文字を見ましたが、恨みを抱えたもののようでした。そこでその言葉を使って〔減字木蘭花〕にして次のようにいいました。

目にあふれる涙、
昔の青い楼は空のように遠い。
秋の月 春の花も
姉妹の住むいつもの家には比べられない。

水辺の村 山の駅、
日は暮れて 力なく空を行く雲。
錦の文字はひそかに裁たれ、
西風に立ち尽くしても 手紙を届けるという雁は来ない。

七、劉過の南楼令

劉過(字は改之、号は龍洲)が武昌に旅をしたとき、柳阜之、劉去非、石民瞻、周嘉仲、陳孟参・孟容の兄弟とともに、安遠楼、つまり南楼に集まりました。宴席では黄という姓の歌姫が酒を勧め、劉過に詞を求めましたので、彼女のために〔唐多令〕を作ってやりました。次のようなものです。

蘆の葉は川の洲に茂る。
寒々とした砂を浅い流れが巡り洗う。
二十年を経て再び南楼を訪れた。
柳の下に舟を繋ぐけれども まだ落ち着かない、
幾日もたたないうちに また中秋を迎えるのか。
黄鶴磯の切り立った岩の上。
あの時の友は今 元気でいるだろうか。
もとのままの川も山もすべて新たな愁いとなる。
モクセイの花を買い一緒に酒を運んで遊んでも、
結局は若いときとは比べようもない。

今この曲調を〔南楼令〕ともいうのは、この作品からなのです。

八、劉過と黄由の妻

崑山の人である黄由(字は子由)が蜀の長官だった時、黄州を通ることがあったのですが、彼の妻は中央の役人だった胡晋臣(字は子遠)の娘で、書が上手でした。蘇軾の旧居の雪堂を遊覧し、妻の胡氏はその壁に蘇軾の前赤壁賦・後赤壁賦を書き付けました。劉過は立ち寄ったときにそれを見て、その後に〔沁園春〕を書きました。次のようなものです。

手綱を引いてゆっくりと駆けさせると、
子どもたちが集まって、
神仙の絵を見ている。
芹の生える塘を雨が通り過ぎ、
泥は雨に香り 道は柔らかい。
金蓮を踏む小さな足を折って乗るのは、
小さなあじろのこし。
柳に沿って行きながら詩を作り、
花をくぐり抜けながら句を探す。
花の蕊に鼻を寄せ 柳の枝をたぐり寄せて ゆったりとしている。
通り過ぎるところは、
鬱蒼とした松が道を挟んで立ち、
来駕をふれまわらなくてよい。
清らかな泉や奇怪な形の岩がめぐり、
まことに風景は 江淮それぞれ異なる趣がある。
思いやる 蘇軾の賦が書きあがって、
白い壁の文字を薄絹で覆った。

西山の句は素晴らしくできあがり、
真珠の簾を晴れた空に巻き上げたことだろう。
白い玉でできた邸宅の奥深く、
長官の黄金の印は立派で、
卓文君のようなこの才女を越える人はいないだろう。
筆をふるったところに、
見えるのは 水茎も鮮やかに壁に書かれた、
楷行草の文字。

黄由はそれを聞いて十分な贈り物を送りました。

九、劉過と芸妓

劉過が四明で科挙を受験した時、昔なじみの芸妓に会いましたので、彼女のために〔賀新郎〕を作ってやりました。

年をとった司馬相如はくたびれた。
妻の卓文君に、今となっては
どうして気晴らししようかと話しかける。
衣には都のほこりが染みつき、
かぐわしい紅の いまもなおやわらかな色が空しく残る。
ともに 腸も断たれようというもの。
一夜 今年初めての涼しさを感じて旅の宿に眠り、
梧桐にぱらぱらと降る雨を秋風が震えさせるのを聞く。
燈火が小さくなっていく中、
初めて会った時のことを思い出す。
高殿は低く 玉の簾も巻き上げさせない。
夜の化粧も落ち、翠の眉もくずれ、涙の痕が顔に残る。
愁いがやってきたら酒におぼれよというけれど、
愁いの深さに比べて酒が浅すぎるのはどうしようもない。
ただ、焦げた名琴、白い絹の団扇に思いを託す。
琵琶で川辺の曲を奏でないでくれ、
荻の花、楓の葉が悲しみ怨むではないか。
雲がはるかに重なり、
小さな真心は遠い。

この詞は天下で歌われました。江西の人で、鄧南秀の詞だとする者がいるが、そうではありません。劉過にはかつて自らそのことを弁じた書き付けがありました。

十、劉過の美人詠二首

劉過は好んで〔沁園春〕を作り、辛棄疾(字は稼軒)に献じ、郭杲に贈り、孫季和に送った諸篇は、いずれも人々に広く知られていました。美人を詠じた二首は、とりわけ繊細華麗で愛すべき作です。美人の足を詠じた〔沁園春〕は次のようなものです。

洛水の波の上を軽く渡り、
誰のために忍び歩いて、
ひそかに埃を舞わせるのか。
覚えている 香る小道で花を踏んでも、
乱れ散った紅の花は損なわれなかったし、
苔むした石畳を歩いても、
柔らかな緑の苔には痕も残らなかった。
玉を施した絹の靴は行き渋り、

詩余ものがたり　南宋篇（一）

金の模様はほっそりとして、
爛漫とした春を載せきれない。
楽しく遊び疲れると、
笑いながら人につままぜ、
かかとが脱げかけた。

時には歌を作って、
ひそかにおもわず、
つま先でしきりに小さく拍子を取る。
思い出す　金蓮の模様が揺れ動き、
刺繍のおしどりは連れ合いを得たこと。
ぬいとりの敷物に立ち　曲が演奏されると、
鳳は舞い立って軽やかに分かれていく。
見えなくなると苦しみ恨み、
半ばあらわれると心ひかれ、
風にたなびくもやのように揺れるスカートから現れてはまた消える。
それは何に似ているかご存知か。
出たばかりの三日月が、
浅みどりの雲に隠れるのに似ている。

美人の爪を詠じたのには次のように言いました。

融けて薄くなった春の氷か、
軽く削った玉か、
細長くのびて曲がっている。
鳳凰の縫い取りの靴についた泥を見ると、
あの人にもたれかかって　はがし、
龍涎香の煙が絶えようとすると、
火をかき起こそうと軽く翻る。
琴の手習いをしてみると、
弦を切りそうになり、
水をすくおうとすると　波の下で魚の鱗のように冷たくきらめく。
柔らかな指で、
花を摘めば香りが広がり、
棗の皮を剥くと赤くまだら模様になる。

時にはおしろいの混じった涙をこっそりと拭い、
思い出すのは　柳下恵（のような堅物）に玉のようなそれを見せたこと。
思えば　二人の気持ちは寄り添い、
玉のような身体に触れた。
逢える日をひそかに数えて
闌干のあちこちに刻みつける。
あの人を思うたび、
静かな部屋で口ずさめば、
赤い唇　白い歯のあたりになめに寄り添う。
なんとなまめかしいこと、
仙さんをこっそりとつねる、
春を無駄に過ごさせてはならない。

世間では劉過は辛棄疾をよく学んで豪放な詞を作ると言いますが、これなどは様子を細やかに描いたと言えましょう。

十一、謝希孟

謝希孟（字は古民、改名して直という）は、陸九淵（号は象山）の高弟

でした。若い頃は豪胆な俊才で、遊里に遊び、芸妓の陸氏と親密でした。陸九淵はいつもそのことを叱りましたが、謝希孟はつつしんで謝るだけでした。ある日、また芸妓のために鴛鴦楼を建てましたので、陸九淵はまたも叱りましたが、謝希孟は「ただ楼を建てただけではありません。記も作ってやりました」と謝りました。陸九淵は彼の文章を好んでおりましたので、思わず「楼の記はどういうものか」と言ってしまいました。謝希孟は即座に冒頭の「(呉の名将の陸)遜・抗(父子)、(文学者の陸)機・雲(兄弟)以後、天地の英霊の気は、男には集まらず、女に集まる」を口に上しました。陸九淵はからかわれたのを知って黙ってしまいました。謝希孟は何度も通ううち、芸妓のところにいたときに、ぼんやりと悟るところがありまして、たちまち帰郷の思いが起こり、何も言わずに立ち去りました。芸妓は川辺まで追いかけてきて、悲しみ慕ってやみません。謝希孟は毅然として動じず、首にかけたきれを取ると、短い詞を書いて与えました。次のような詞です。

二本の櫂がたてる波は静かに広がり、
岸を挟んで青い山がおおうように続く。
君は家に帰れ　私は一人帰る、
どのように過ごせばよいかを言ってきかせよう。

私はきっぱり君への思いを断つ、
君は私を思慕するな。
君がこれまで私に与えてくれた心を、
他に与えてよい。

十二、陸游と唐氏

陸游(字は務観、号は放翁)は唐氏を妻に迎えました。唐氏は唐閎の娘で、陸游の母の姪でした。夫婦はたいへん仲睦まじかったのですが、姑は気に入りません。家を出しても絶縁するのに絶えられず、陸游は別館に住まわせて、ことあるごとに通っていました。姑はこれを知って遮り、それに先だって伴って出たものの、結局平安にはいられません。それから仲が途絶えたのです。唐氏はのちに皇帝の一族の趙士程と再婚しました。春のある日、遊びに出かけたところ、禹跡寺の南の沈園で陸游と出会いました。唐氏は夫の趙氏に話して酒肴を届けました。陸游は悲しみ、思うところがあって次の〔釵頭鳳〕を作りました。

桜色の柔らかな手、
黄色の封のある酒、
町に満ちる春　垣根の柳。
春風は意地悪、
喜びは短かった。
胸いっぱいの愁い、
何年の別れか。
間違っていた。
間違っていた。
間違っていた。

春は昔のまま、
人は空しく痩せ、
涙の痕が赤く薄絹のハンカチを濡らす。
桃の花は散り、
静かに池にのぞんで立つ高殿。
永遠に心変わりしないという誓いは今も胸にあるけれど、
錦に書いた手紙は届けられない。

だめだ。
だめだ。
だめだ。

唐氏も詞が上手でしたので、その詞を見て返しの歌を詠みました。

世間は薄情、
人の情は意地悪、
雨のふる黄昏に　花は散り落ちる。
夜明けの風に乾いて、
涙の痕が残っている。
胸の思いを手紙にしたためようと、
闌干に一人　身をもたせかけて言う。
難しい。
難しい。
難しい。

人はそれぞれに変わり、
今はむかしではない、
病んだ魂はいつもぶらんこの綱のよう。
角笛の音が寒々と届き、
夜はたけなわ。
人に尋ねられるのが恐ろしくて、
涙にむせびながら楽しげに振る舞う。
うそ。
うそ。
うそ。

唐氏はそのまま恨みのために死んでしまったのです。

十三、陸游の妾

陸游はある時、駅の壁に書かれた次の詩を見ました。

玉の階段あたりで　静かな夜にコオロギが賑やかに鳴く。
金の井戸のそばに立つアオギリの葉が　もとの枝に別れを告げる。
一夜　もの寂しさに眠られず、
灯を点させて起き上がり　秋に感じる詩を作る。

誰が作ったのかと尋ねると、駅の役人の娘だということでしたので、そのまま妾として迎えました。半年あまり経っても妻が認めませんので、返すことにしました。妾はまた次の〔生査子〕を作りました。

眉に上る愁いを知っているだけで、
愁いがやってくる道を知らない。
窓の外の芭蕉に、
ザーザーと黄昏の雨が降りかかる。

朝早く起きて崩れた化粧を整え、
身支度して愁いを追い払う。
春の山のように眉を描いてはいけない、
もとの通り愁いを留めてしまうから。

十四、陸游と忠州（チュウシュウ）での宴席

陸游は、忠州（おう）の王長官の宴席で、〔玉胡蝶〕を詠じました。次のよ

うなものです。

疲れた旅人はいつも旅にあり、
都では美女の前でわざと鞭を落とし、
瀟水・湘水では女神に帯玉をもらった。
今夜はいったいいつなのだろうか、
宋玉の高唐の賦のように美女をやっと詠じるのだ。
刺繍のカーテンが開くと、香りよい埃が舞い立ち、
蓮を踏むように歩む、その左右には銀の燭台が並ぶ。
こっそりと細かに見れば、
燕は恥じて隠れ鶯は妬ましく思う美貌、
蝶や蜂が(恋の仲立ちに)忙しい。

忘れられない。
香り豊かな酒をしきりに勧めてくれると、
かすかな寒さはどこかへ去り、
玉の水時計が刻む時はまだ長い。
心の奥深く どれほどの思いを抱いているのか、
愁わしげな歌はやみ 月の光が廊下に差し込んでくる。
帰ろうとすると、長官の王殿は笑って尋ねるのだ、
「少し近よると、丞相殿はたいそうお怒りになる」と。
彼女は人の腸を断つほどに悲しませた、
たとえ送ってくれたとしても、
馬に乗って帰るのにどうして妨げとなることがあろうか。

その描写は姿を描き尽くし、これを口ずさめばその容姿が見えるようです。

十五、陸游と蜀の女性

陸游が蜀にいた時のこと、惹かれる女性があるたび、いつも詩詞に詠じては送っていました。「碧玉は今年まだ破瓜の十六にならないが、歌や舞を身につけて大官の家に入った」とか、「小箱には呉の便箋が三百枚、細かい字で春の愁いを書こうというのだ」とか、「上等の皮衣を着て肥えた馬にまたがり錦水の浜でほしいままに遊び、最も繁華なこの地で閑な人となる」、「ゆったりと思うがまま 君は知っているか、この身と浮名とどちらが重いか」とあります。故郷に帰ってから、再び詩の意境を〔風入松〕に詠みました。次のようなものです。

十年のあいだ皮衣を着て肥えた馬にまたがり 蜀の錦江のほとり、
繁華な町で酒を飲んでいるばかりだった。
金に飽かして鶯と花とにあふれる中ですぐれた女性を選び、
ほしいままに青春を謳歌した。
笛を吹けば水の中の魚や龍がすべて出て来、
詩を作れば美しい風も月もすべて新たな姿を見せる。

頭巾の中は白髪ばかりというのに、
なおも官職にある身であることを自ら憐れむ。
鳳楼でのあの時の言葉を覚えている。
浮名を問えば、何が我が身に似ているだろうか。
呉の地方の便箋に書いて送ろうとするのは、
これぞまことの閑な人というもの。

これもまたうまく情を述べたと言えましょう。

十六、趙徳荘

趙徳荘(字は彦端)には、『介庵詞』という詞集があり、宋王朝の親族でも一番です。その「波の底で夕日があかく湿っている」の句は、孝宗からたいそうお褒めをいただきました。京口にいたとき、風雅な建物や艶やかな芸妓が他所に倍しており、人々がみな仙女たちと見なしているのを知りまして、その中から優れた十人を選び、それぞれに〔鷓鴣天〕を作って贈りました。蕭秀には次のように詠じました。

春の盛りのお嬢さんはちょうどかんざしを挿す年頃、
蕊宮の仙女が瑶池に降りてきたよう。
簫の名手の弄玉が高楼に上って月を愛でているのか、
琵琶の弦を払う王昭君が嫁ぐ前か。

雲のように美しく、
柳のような腰つき、
綺羅の衣装を身にまとって無理して人に寄り添う。
天が花々の咲き乱れる庭に流し、
東風に最初にほころぶ枝を自分のものとさせたのだ。

蕭瑩には次のように贈りました。

花のような姿 玉のような顔、
やさしくなよやかにひっそりと歩む。
秋の川が流れるような 酔ったまなざし、
遠くの山を描いたような うっすらとした眉。

恵みの雨がやみ、
明け方の風は冷たく、
一枝の紅い杏の花が朱色の闌干のあたりに咲く。
私は天台山で道に迷った色男の劉晨か、
前世の因縁でこの世で巡り会ったのだ。

欧懿には次のように贈りました。

月は金の波を輝かせ 雲は櫛に満ち、
月の女神の素娥は なぜ華やかなこの町に降りてきたのだろうか。
ひらひらと舞う袖は 花を渡る蝶、
よく響く歌声は 連ねた真珠。

翡翠の簾、
珊瑚の枕、
錦の掛け布団 氷の敷きもの 水紋のベッド。
春の光が九十日間羊城にきらめき、
咲き乱れる花々もまるでかなわない。

桑雅には次のように贈りました。

雲のような黒髪 青い糸に玉が輝く冠、
笑えば媚態が様々に眉に生じる。
春の終わりの芍薬を もやとともに折り取り、
秋の暁の蓮を 露を払って見る。

星のように輝く聡い目、
月のように曲がった眉、

舞い狂う花の影が闌干へと差し上る。
酔って仙鸞に乗って飛び去り、
銀河へは行かず 月の広寒宮へ向かう。

劉雅には次のように贈りました。

酔えば花の枝を手に カワセミの羽の髪飾りをまわせ、
たっぷりとした春の風情であだっぽい。
千金の笑みを浮かべてカスタネットの音色と争うように、
一握りほどの細い腰が舞う。

歩けば艶やか、
座れば愛らしく、
月を離れて空を下ってきた。
美男の檀郎が尋ねてみれば かんざしを挿すお年頃。
春二月の風が柳の枝をもてあそぶ。

欧倩には次のように贈りました。

新たに梅の化粧が玉のような顔に加わり、
寿陽公主のようなあなたは水晶宮にいる。
なごりの雨に洗われて 梨の花のように白く、
つむじ風のように舞って 紅の蓮の花が揺れる。

雲のかかる枕元、
月の射す窓、
金の香炉からは鳳のカーテンに香煙が吹き出す。
凡才は 雲を凌ぐ風格があったとしても、

卓文君ほどのこの才女に一日付き従って学ぶことを承知するだろう。

文秀には次のように贈りました。

しとやかに愛らしい 十六歳の春、
いつ繁華な町に吹き落とされたのか。
桃源郷ではひっそりと春の鳥が鳴き、
蓬莱島をしずかに暮の雲が閉ざす。

美しい顔は柔らかく、
眉は描いたばかり、
紅おしろいで天真の美しさを汚すことを承知した。
楊貴妃は才子の顔のようではないけれど、
君王の寵愛を得ることができたのだ。

王婉には次のように贈りました。

まだ十八にもならない、
あの緑珠のように可愛らしくお団子に結い上げた髪。
清らかな姿態はよく香る玉、
艶やかで賢い姿は人の言葉を解する花。

鳳のかんざしを挿し、
鴉のように結った鬢の毛、
舞う腰つきは 春の柳が風を受けてそよぐよう。
時には馬を引く人が争って見るものだから、
紅い窓は破られて赤い薄絹を張り直した。

楊蘭には次のように贈りました。

額のそばには二つのまげ、
雲が集まって巫山の南に降りてきたよう。
連れだって舞う蝶は互いに追いかけ合い、
二茎に分かれた蓮はもともとおそろい。

刺繍の袖を翻して、
霓裳羽衣の曲を舞えば、
風に舞う柳の綿のように 軽やかに思いのまま。
花の神が心配なのは 引き留めるのは難しく、
早晩 君王の恩愛をうけて未央宮へ入ってしまうこと。

呉玉には次のように贈りました。

カーテンが揺れてひそかに埃がたち、
清らかな歌がゆっくりと響いて 春が戻ってきた。
月は 灯籠節の灯火に混じって雲の間に落ち、
人は 雪の後に新たに咲いた梅の花を眺める。

仙人の手のひらに降りた露、
舞衣装の雲、
酒にくたびれて緑のまげも傾いた。
寝室での陽台の雨は厭わないが、
ひまな私と夕暮れの雨上がりを楽しんでくれないか。

総詠には次のように詠じました。

神仙が一同に集まる奇観、
伝説の美女の蘇小小と西施にも勝るだろう。
愛らしくも 月を削って歌扇にし、
雲を切って舞衣に仕立てた。

軽やかなカスタネット、
玉のような音がそろい、
夕焼けの空の向こうに 雁の列が低く飛ぶ。
みるみるうちにそれぞれ風流な伴侶を得て、
振り返りつつ鸞に乗って もと来た道を帰っていく。

調べてみると蔡伸（字は友古）に「遊里の美女図に書き付ける」という〔鷓鴣天〕があり、最初のものに「東風第一枝」と題しているのは、思うにこれを指すのでしょう。

十七、阮閱

龍舒の人、阮閱（字は閎休）は、建炎年間に袁州の知事となり、退官後は宜春にいました。そこの官妓の趙仏奴に〔洞仙歌〕を贈り、次のように言いました。

趙家の姉妹は、
後宮の昭陽殿にいるべきなのに、
どうして俗世に趙飛燕がいるのだろうか。
彼女に会った人は皆「江南で第一」と言うが、
江北でも、ほとんど見られないほどだ。

手放すにしのびない 彼女は性質がよく、
怒ることを知らず、
いつも桃の花のような笑顔。
酒を前にした席で、
会えば帰るべきなのだが、
こんな風に、
幾度 仔細に見られるだろうか。
まばたきせずに彼女を見ていたい、
まばたきの時間に、
何度か多く見られるのだから。

十八、陸淞

国が南に移ってから、南宋の王室の若君で、会稽に居る者がいました。その庭園は浙東では一番、集まる客も当時の秀才ばかりでして、陸子逸もそこにおりました。若君に仕える歌姫で盼盼という名のものは、容色も才芸もひときわ素晴らしく、陸氏は彼女を気にかけておりました。ある日の宴席で、盼盼がたまたま酒を注ぐ列にいませんでした。陸氏がそのことを尋ねると、午睡しているというのです。急いで呼びよせますと、枕の跡が頬についていて、その姿はますます色香を増しています。陸氏は彼女のために〔瑞鶴仙〕を作って次のように言いました。

桃色の顔に紅い枕の跡、
目覚めたとき、冠もまだ整えていない。
屏風のあたり 麝香の香は消え、
みどりの眉をひそめ、
おしろいの上を流れる真珠の涙をぬぐう。

詩余ものがたり 南宋篇（一）

建物の奥深く 昼は長く、
燕は 風に揺れる簾や藻の模様の井戸のあたりを飛び交う。
恨めしいのは 恋の思いを語る人がいないこと、
近頃 帯もすっかりゆるくなってしまった。

何度も思い出す、
消えかけた灯火 朱のカーテン
淡い月 薄絹張りの窓、
あのときの風景。
逢瀬の陽台への道は遙かで、
ふたたび会おうにも、
頼るすべもない。
帰ってきたなら まず指さして、
花の梢を眺めさせ、
胸の内を仔細に尋ねたい。
することもなく春を過ごさせて
どうして心穏やかでいられましょうと。

この詞は当時たいへんに流行り歌われ、その後盼盼はとうとう陸氏のものとなったといいます。子逸の名は淞、辰州の長官だったこともあり、陸游の弟です。

十九、張元幹

張元幹(字は仲宗)は、詞を作るのが上手でした。胡詮(字は邦衡)に送った詞と、李綱(字は伯紀)に贈った詞との二首によって官位を剥奪されました。彼の剛毅な作風と固い節義とは、人々に敬われました。けれども短編の詞はいつも恋情を送るもので、例えば楊聡父の侍女が

なますを調理したのを〔春光好〕に詠じました。

花は雨を恨み、
柳は風を嫌い、
旅の愁いは濃い。
じっと座って 霜のように白く輝く刀をひらめかせて雪を砕き、
酒をともにする。

春のタマネギのような玉の指を煩わせ、
箸も置かず食べて 金の皿はもう空になった。
さらにこの中に手紙を探して、
二人の思いを通じ合う。

張子安の舞姫のためには〔綵鸞帰〕を作りました。

真珠の靴は囲みを争い、
ふいに起こった春風は拍子に合わせてうねりめぐる。
笛がせき立てるのにもかまわず 静かに、
朱色の衣を整える。

おしろいは香りを融かしてしっとりと 人の勧めに従い、
眠たげな顔は花のように愛らしく ひときわ好い。
都の元宵節の夜 旧家で過ごす時、
誰を一番に数えようか。

二十、張孝祥

張孝祥(字は安国)は京口の知事でしたが、王宣子と交替しました。多景楼が落成したので張孝祥に楼の扁額を依頼し、公庫から原稿料として銀二百両をおくりましたが、張孝祥はこれを断り、紅色の薄絹百疋を求めただけでした。楼で大宴会が開かれ音楽が奏でられ、酒もたけなわの頃、張孝祥は筆を執るたび新作の詞を作り、妓女たちに命じて合唱させ、紅色の薄絹をすべてねぎらいとして送りました。